

2018年度 入試問題・傾向と対策

入試問題集

2018

【推薦入試／一般入試】

《全制度・全日程 出題傾向を統一》
大手予備校講師陣による問題分析付き

桃山学院大学と桃山学院教育大学は
「推薦入試（前期・後期）」「一般入試」において
同一試験問題で実施します。



桃山学院大学
St. Andrew's University



桃山学院教育大学
St. Andrew's University of Education

問 次の文章を読んで、あなたの意見を六〇〇〜八〇〇字で述べなさい。

私たちは過去がどのように形成されてきたのかを考察することによって現在をつかみ、未来をみつけたらと。しかしそれは、大きな錯覚のなかでおこなわれている営為なのではなかったか。

過去とは現在から照射された過去である。

もちろん私たちは、過去のある事実を知っている。たとえばフランス革命は一七八九年に起こった。その事実も否定することはできない。ところが一七八九年にフランス革命が起きたという言葉が発したとき、私たちは単なる事実を述べているのではなく、すでにそれが近代革命であることを知っていて、近代革命のもつ意味を含意させてフランス革命を語っている。すなわちそれは、解釈された一七八九年のフランス革命なのである。そしてその解釈は現在の問題意識とおしておこなわれ、しかもその問題意識は個人の問題意識であるとともに、その時代に包まれていくがゆえに成立する個人の問題意識である。

現在を包んでいるものが、個人にそのような問題意識を成立させ、それを介して解釈された過去が成立する。とするとここに成立した過去とは、事実としての過去ではなく、物語られた過去、ということにはならないか。

同じように、たとえば私たちは一六〇〇年に関ヶ原の戦いが起きたという事実を知っている。しかしこれも戦国時代の最終的な終了であり、幕藩体制の確立という、現在の問題意識からとらえられたひとつの時代認識として、私たちは語っている。やはりここにあるのも物語られた過去である。

とすると、事実としての過去はどこにあるのだろうか。認識された過去が、現在の性なからつかみとられ、展開された過去であるとするなら、事実としての過去はつかみえないものになるはずだ。

だが、しかし、と多くの人は言うかもしれない。たとえ正しく認識することには多くの困難があるとしても、事実としての過去は実際に成立していたのだ。だからそれを正確に読み解こうとして、人々は多くの文献を読み、それを正確に読解しようとして、これまで努力してきたではないか。それを積み上げていけば百パーセント正確な過去はとらえられなくても、事実に近い過去の描けるはずではないのか。

このように述べられたら、私はそれを半分は肯定し、半分は否定するだろう。たとえば近代になって自動車が発明され、移動、運搬手段の中軸になっていった歴史がある。そしてこの歴史は、どのようにして自動車が開発され、いかに改良、量産化され、社会のなかで利用されていったのかを多くの資料を使って精密に考察すれば、事実としての自動車の歴史に近似的な歴史を描くことはできるだろう。

だがそこで問わなければならないもうひとつのことは、自動車の歴史をおして研究者は何を語ろうとしているのか、である。近代的な産業の発達史なのか、技術者たちの苦闘の歴史なのか、そこで働いた労働者たちの近・現代史なのか。今日なら環境破壊の大きな原因がいかに形成されていったのかという視点もありうる。私たちが包んでいる世界が、このような視点も要求しているからである。

とすると結局生まれてくるのは、現在の問題意識によってとらえられ、物語られた自動車の歴史、ということになるだろう。

内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(講談社現代新書、二〇〇七年)より抜粋

2018年度 推薦入試 試験問題 後期 小論文

問 次の文章を読んで、あなたの意見を六〇〇〜八〇〇字で述べなさい。

機械工業関連のものづくりには欠かせない道具に、金属を削る刃物がある。いろいろな刃物があるがドリル(錐)は穴をあける刃物のひとつで、太いものになると直径が一〇〇ミリなんていうドリルもある。細いもののはうは、いまでは限りなく細くなっている。たとえば毛髪の三分の一ほどのドリルだってある。〇・〇三ミリのドリルで金属に穴をあけられるのか、と不思議だが、ちゃんとあけられる。

二〇〇七年六月に、東京国際展示場(東京ビッグサイト)で、第一回機械要素技術展(リード・エグジジション・ジャパン主催)が開かれた。参加企業一三〇〇社余り、三日間の来場者は八万人と盛況であった。要素技術ということばは耳慣れないが、ひとくちで言えば、ものづくりの最も基盤的な技術である。鉄を溶かす、鉄を折り曲げたり絞ったりする、あるいは削ることでいろいろなものをつくる。切削にはいろいろな刃物を使う。するとある会社がこんな刃物をつくりましたと展示する。じつに多様な要素技術の展示があつて、それはそのまま日本の産業の底力を表現しているのであつた。

その一三〇〇社のひとつに、山形県寒河江市から参加したマイスターという会社がある。従業員五〇名ほどの、刃物を中心とした特殊な道具づくりをする会社である。その会社の展示品のなかに、〇・〇三ミリのドリルがあつた。そのドリルで超硬合金という特別硬い金属に穴をあけたものが、顕微鏡でのぞけるように展示してあつた。

そのような細いドリルをつくることのできたのもびつくりであるが、この会社はこのドリルを使って穴をあけることができる安価な機械をもつてしまったという。そのことにまたびつくりさせられた。もちろんそういう機械は存在するが、その機械にはほかにもたくさんの機能がついていて、値段がべらぼうに高い。これから微細な穴加工が、さまざまな産業分野で必要になってくるとしたら、小さな工場で手軽に使える機械が必要になるのではないか。マイスターの工場の人たちは、〇・〇三ミリのドリルをつくりながらそう考えて、新しい機械をつくつたのだという。

いまではさらに〇・〇一ミリのドリルまでつくってしまった。どこからの注文でつくつたのではない。しかし近い将来もつとたくさんさんの工場が、〇・〇三ミリとか〇・〇一ミリとかいうような穴加工をするにちがいない。とすれば、もつと安い手軽な機械がほしくなるのではないか。

このように、小さな工場の人たちのなかには、考えようによっては用途不明の道具を、むしろ積極的につくっている人たちがいる。自分たちはこれだけのものをつくれます、さあどうぞこれを使った新しい用途を考えてみてください。機械要素技術展に参加したたくさんさんの企業が、口をそろえてそのように呼びかけていたのであつた。

自動車メーカーや家電メーカーの展示会のような華やかさこそないが、日本のものづくりを下から支える中小企業からのこのような、いわば道具づくりの展示こそは、日本の産業の底力をしめすものとして心強かつた。

小関智弘『道具にヒミツあり』(岩波ジュニア新書、二〇〇七年)より一部抜粋